| | テーマ | 主な内容 |
|---|---|---|
| 1 | キリシタン史概要と前史 | 1549 年以前のキリスト教の影響を含め、キリシタン史全体を概観します。 |
| 2 | ヤジロウとザビエルの来日 | ザビエルが、マラッカでヤジロウと出会い日本宣教を志した経緯と２年強に亘る日本伝道の足どりを追います。 |
| 3 | 高山右近ら<br>キリシタン大名 | キリシタン大名が果たした功罪と、その中でも、特に影響の大きかった高山右近について学びます。 |
| 4 | 巡察師ヴァリヤーノと適応主義 | 日本に宣教に来たザビエルとその後継者コスメデトルレス神父や巡察師ヴァリヤーノが採った「適応主義」について学びます。 |
| 5 | イエズス会の教育と信徒組織 | 未だ「日本語聖書」が無い時代に、どのように伝道し、教育をして行ったのかを学びます。 |
| 6 | 秀吉の伴天連追放令と迫害 | 秀吉の九州平定以後、突如、宣教師追放が告げられます。いったい、どんな理由があったのかを学びます。 |
| 7 | 鎖国と徳川幕府による禁教 | キリシタンに対する組織的で徹底的な弾圧と、外国との交流を長崎の出島に限る鎖国政策に至った経緯を学びます。 |
| 8 | 潜伏キリシタンと高札撤去 | 九州長崎の一部や五島列島で、自分たちの信仰を隠しながら守り続けてきた「潜伏キリシタン」について学びます。 |

# キリシタン時代90年➡鎖国215年間
# ➡プロテスタント宣教165年

キリシタン伝道発展の時代　禁教と潜伏の時代　プロテスタント宣教

前史

戦国時代・織田信長　豊臣秀吉　江戸時代・徳川幕府260年　明治　大正　昭和

潜伏キリシタン

鎖国215年

一九四五年　日本国憲法制定

一八八九年　大日本帝国憲法

一八七三年　禁令の高札撤去

一八七一年　岩倉使節団

一八六五年　長崎大浦天主堂献堂

**一八五四年　日米和親条約**

長崎の出島

オランダと中国のみ外交

**一六三九年　ポルトガル船入港禁止**

**一六三七年　島原の乱**

**一六一二年　キリスト教禁令**

一六〇三年　徳川家康　江戸幕府

一六〇〇年関ケ原の戦い

一五九二年　豊臣秀吉　太閤となる

**一五八七年　バテレン追放令**

一五八二年　本能寺の変

**一五六四年　高山右近受洗**

**一五四九年　ザビエル来日**

90年

215年

165年

伝道進展38年間　迫害52年間　鎖国　禁教　プロテスタント宣教

# イエズス会の教育

適応主義
現地の働き人を養成する

## 日本人の祭司、修道士の養成

・セミナリオ（初等教育）
・ノビシアド（イエズス会員養成）
・コレジヨ（高等教育・神学教育）

## 一般信徒の教育

・説教と教理問答
　カテキズム教育
　『どちりいな・きりしたん』
・コンフラリア（組）を通して
　教理の学び

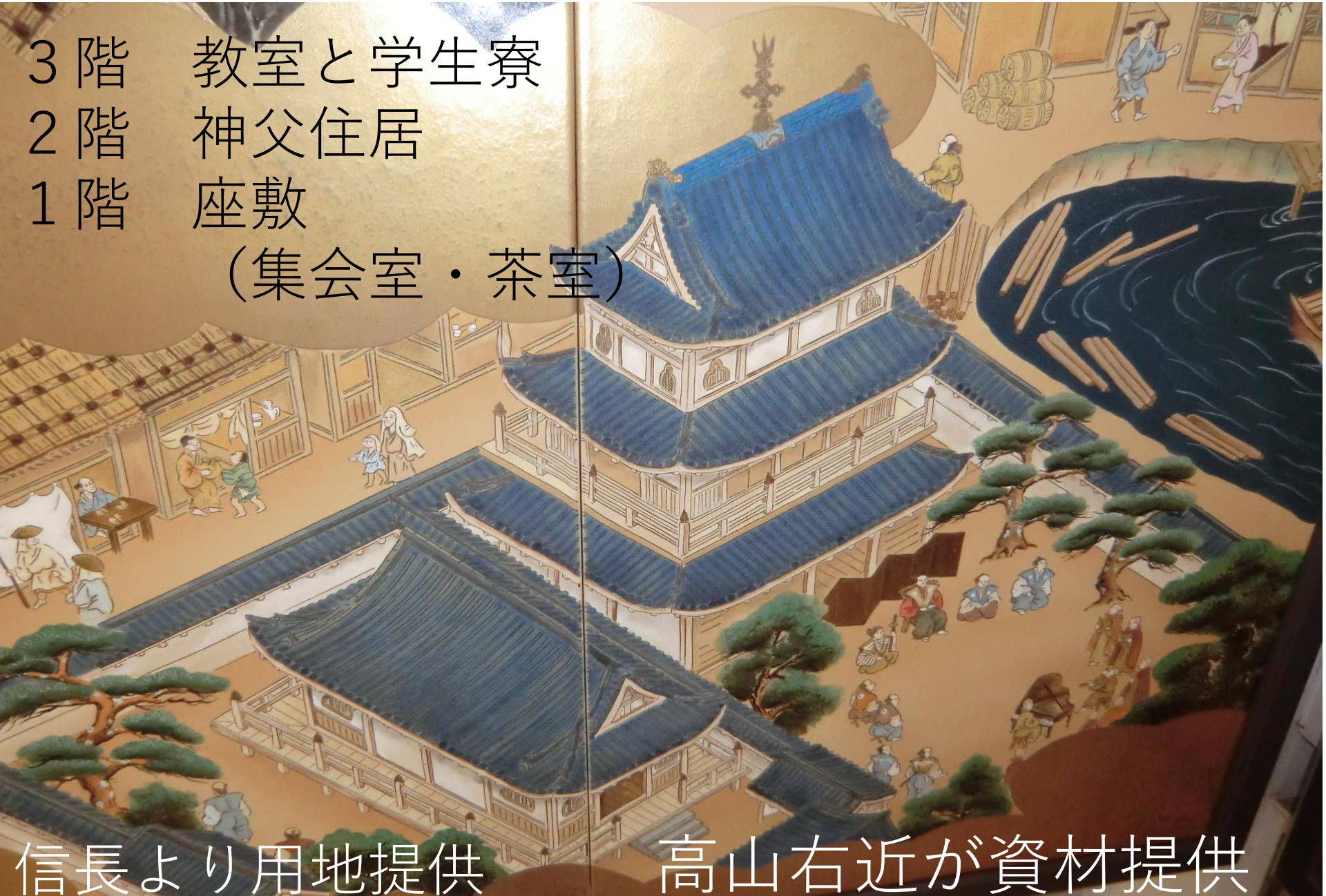
# セミナリオ（初等教育）

ヴァリニャーノは、織田信長の元を訪れ、安土に土地を願った。城の隣のよい土地が与えられ、1580年に安土セミナリヨが完成した。

安土セミナリヨは純和風建築三階建てで、客をもてなすための茶室が付属していた。高山右近は、キリシタンである家臣の子弟8人を安土に送り、30人ほどの学生が住み込みで学んでいた。その中に後に長崎で殉教するパウロ三木や元和の大殉教で死んだアントニオ三箇がいた。

セミナリヨでは、ラテン語の古典と平家物語などをテキストに日本の古典を学ばせた。また、それまでの日本の教育にはなかったものとして音楽と体育が重視された。音楽はフルート、クラヴォ（チェンバロ）、オルガンなどの器楽、およびグレゴリオ聖歌や多声聖歌などの練習が行われた。体力を培う体育も重視され、夏は水泳がおこなわれ、週末には生徒全員が弁当を持って郊外にピクニックに出かけていた。 復活祭やクリスマスには文化祭が行われ、生徒が劇や歌、ラテン語の演説などを披露した。

# 安土のセミナリヨ（1580年）



安土セミナリヨ
◇安土城の天主閣から
　直線距離で700M
◇1581年、信長が立ち寄り、ヴィオラの演奏を聴いたという

本能寺の変により
2年で、焼失

長崎・有馬へ合流

# 安土神学校（セミナリヨ）での生活

## 日課

4:30　起床
5:00　ミサ聖祭、室の掃除
6:00 ～ 7:30　勉強、ラテン語の学習
7:30 ～ 9:00　宿題を教師に見せ注意を受ける（上級生が下級生を指導）
9:00 ～ 11:00　食事、休憩
11:00 ～ 14:00　日本語の学習、作文・習字など
14:00 ～ 15:00　声楽・楽器の練習、休憩
15:00 ～ 16:30　教師の指導によるラテン語学習
16:30 ～ 17:00　自由時間
17:00 ～ 19:00　食事、休憩
19:00 ～ 20:00　ラテン語または日本字・ローマ字の学習
20:00　一日の反省、夕の祈り　就寝

（※以上は、有馬でも共通）

・夏季、暑さの厳しい時には、勉学は中止して夏休みとする。
・毎年一回文化祭（日本語・ラテン語による劇、討論会など）

マルコ・アントニオ・チアッピ著「教皇グレゴリオ13世伝」（1596年刊）にみられる有馬（左上）と安土（左下）の神学校の図。
宮永孝著「安土・神学校の遺址」に掲載の想像図筆者スケッチ（右）

## 食事

日本食：主食・白米、汁、魚　他
日曜祝日は一皿多く、他に果物がご馳走された。

## 服装

屋内では、青い木綿の帷子（かたびら。夏の麻の着物）か着物。屋外では、青色の衣服と黒色の胴服を上に着用することが定められていた。外出時、面会時、青色の着物か他の色の絹衣。

資料：「信長と安土セミナリヨ」三俣俊二著　「安土・神学校(セミナリヨ)の遺址」宮永孝著

# 九州のセミナリヨ、コレジオ

1580年　有馬セミナリヨ創設　（安土のセミナリオと同時期）
第一期生の中から天正遣欧少年使節団4名が選ばれる
（伊東マンショ、中浦ジュリアン、原マルチノ、千々石ミゲル）

コレジオ：府内→加津佐→天草へと移動

1580年、府内のコレジオが設けられた。当時、府内はキリスト教の有力な庇護者であった大友宗麟の本拠地であり、日本におけるキリスト教布教の拠点として、宣教師が滞在し、数多くの信者を抱えていた。ジョアン・ロドリゲスは、臼杵のノビシアドを経て、府内のコレジオで学んだ。

1590年、コレジオは島原の加津佐に移った。加津佐では日本初となる活版印刷機（グーテンベルク印刷機）を導入し、キリシタン版の出版が行われた。

1591年、さらに奥まったところに潜伏するために、コレジオは、加津佐から天草に移動した。天草コレジオ居住者はパードレ・イルマン合わせて約60人。同宿・従僕合わせて60人以上で、合計120人を超える規模だった。食糧倉庫、調理・食堂などがあり、そして印刷所があった。

# 天草コレジオ

- 天草の河内浦には、1591年から1597年までの７年間、宣教師の養成学校である「天草コレジオ」があった。
- 名門コインブラ大学・ペトロ・ゴメス（日本準管区長）執筆の「講義要綱」が教科書として使用された。『天球論』『霊魂論』『カトリック教理要綱』の3部構成で、天球説・天動説・地球球体説などの天文学や、暦学、気象学、地質学、四元素説の紹介もされた。
- 天正遣欧少年使節団の４名も帰国後はここで生活していた。
- 遣欧使節がヨーロッパから持参したグーテンベルグ式金属活字印刷機を使って、キリシタン版を印刷した。

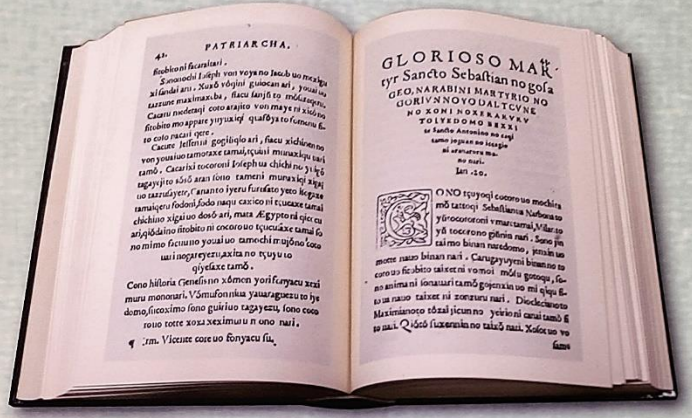
# グーテンベルグ式印刷機
# 1590年「遣欧少年使節団」により日本へ

# 画期的な活版印刷機で発行されたキリシタン版書籍

**Christian tracts published using a revolutionary letterpress printing machine**

用划时代的活版印刷机发行的切支丹版书籍

획기적인 활판인쇄기로 발행한 기리시탄 판서적




「サントスの御作業の内抜書」の復刻版［南島原市所蔵］
Facsimile edition of *Acta Sanctorum* (Acts of the Saints)
[Minamishimabara City]

天正遣欧少年使節の目的のひとつは、布教活動に必要な印刷機を持ち帰ること、印刷技術を習得することでした。随行員のひとりコンスタンチノ・ドラードは、現地で印刷技術を習得し、日本人で初めて活版印刷を行いました。帰国の途中、インドのゴアでは『原マルチノの演説』、マカオでは『天正遣欧少年使節対話録』を発行します。伴天連（ばてれん）追放令の中、持ち帰った印刷機は、加津佐（かづさ）（南島原市）のコレジヨに運び込まれ、1591年（天正19年）日本最初の金属活字を使った出版物『サントスの御作業の内抜書』が印刷されました。その後、印刷機は天草、長崎に移されながら多くのキリシタン版の書籍が発行されました。印刷機は江戸幕府の禁教令に伴いマカオへ持ち運ばれました。

コンスタンチノ・ドラード像
［諫早市立諫早図書館］
Statue of Constantino Dourado
[Isahaya City Library]

天正遣欧少年使節が持ち帰った印刷機のイメージ

# ドチリナ・キリシタン

- イエズス会によって作成されたカトリック教会の教理本。
- ラテン語でDoctrina Christianaと表記する。
- 「キリシタンの教え」という意味
- 1591年加津佐発行の国字本（漢字・仮名）
- 1592年天草発行のローマ字本
- 1600年長崎発行の国字本とローマ字本

長崎版「どちりな・きりしたん」国字本の表紙

# どちりいな・きりしたん目録

第1　掟
第2　キリシタンのしるしとなる尊い十字架のこと
第3　**主の祈り**のこと（主の祈り）
第4　アヴェ・マリヤのこと
第5　サルヴェ・レジナのこと
（カトリックの伝統的な祈祷文で聖母に救いを求める聖歌
第6　**使徒信経**のこと（使徒信条）
第7　神の掟の**十の戒律**のこと（十戒）
第8、９　母である聖なる教会の掟のこと
第10　7つの大罪のこと
第11　教会の7つの秘跡のこと
第12　このほかきりしたんとして大切のことの数々

→師と弟子の問答形式

## ＊ 第一の教え

師　きりしたんの掟(定め)は真実の教えであるから、きりしたんになる者はその理由を聞くことが大切である。あなたはその掟のことを聞いたことがあるか。

弟子　私は『公教要理』を聞いて道理の光を受け、きりしたんになった者です。

師　理解したと思うか。

弟子　理解したことも多いと思います。





師　その内容を全部言わなくてもよい。唯どれほど理解したかを知りたいから、一番大切なことを言ってみよ。

弟子　第一には、無からこの天地を創造された神は、唯一の神であるということです。これこそ私共の現世、来世をとりしきる主です。この唯一の神を拝み、尊ばなくては、来世で救われることは決してありません。この来世の道はきりしたんの掟にしかありません。従ってきりしたんにならなければ、来世に救いはないということを理解しました。

師　人間についてはどう理解したか。

弟子　人間には肉体だけがあるのではなく、不滅の魂を持っています。この魂は肉体にいのちを与え、たとえ肉体が土や灰となっても、この魂は滅びることはありません。

# はじめに

『どちりいなキリシタン』は、日本のキリシタンの教義と思想を知るうえで最も重要な史料です。「どちりいな」とは、ラテン語のDOCTRINAの日本語的な書きなおしで、教義または教義書を意味します。すでにフランシスコ・ザビエルは来日してから、短い教義書をまとめ、彼の後に来るイエズス会師たちは、それを書きなおし、完成するように努力しました。ついに一五九〇年、天正少年遣欧使節の帰国とともに、活版印刷機が到来し、この『どちりいな』は一五九一年早速に印刷されました。



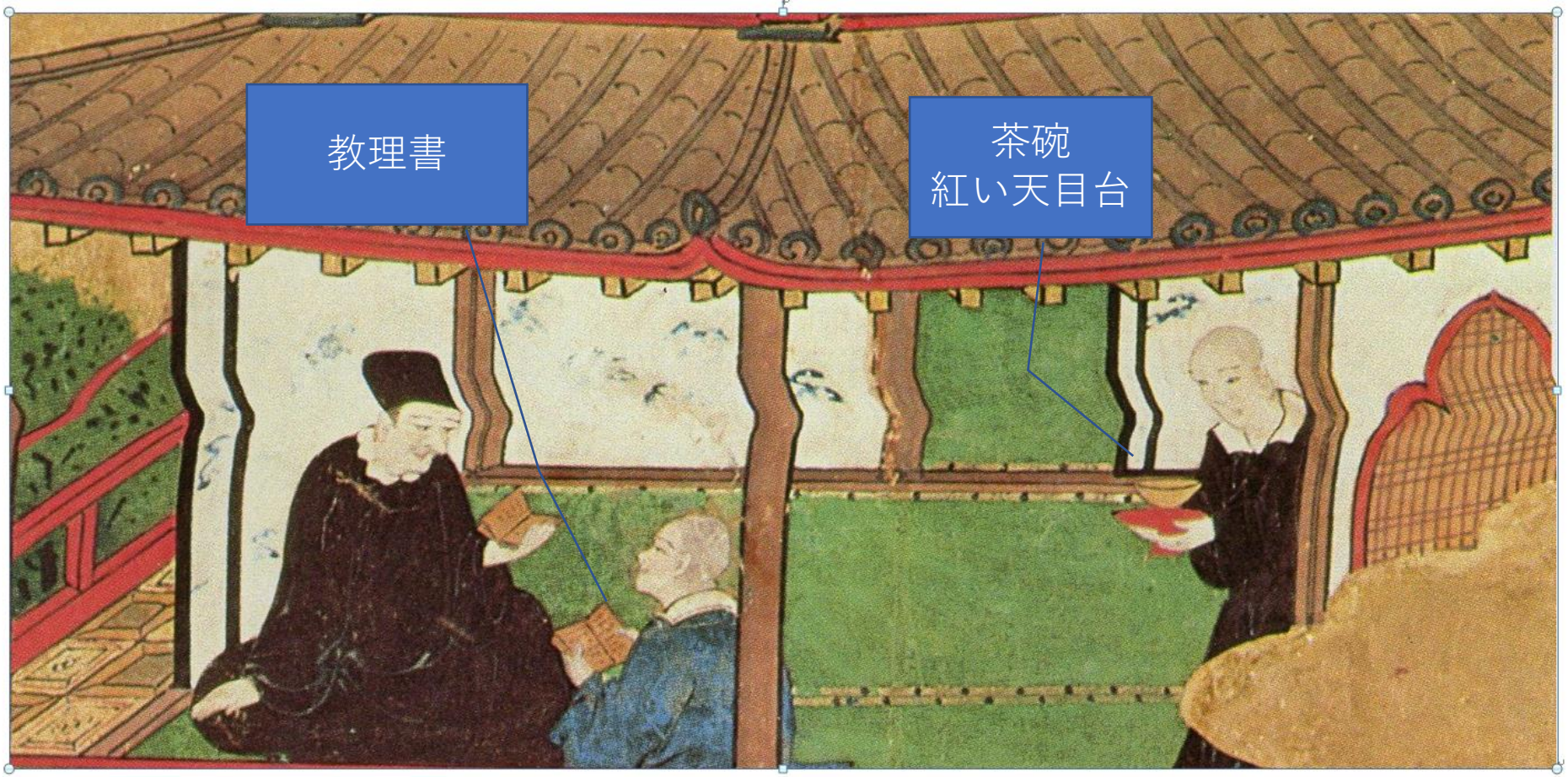


日本という異質の文化の中でキリスト教の教えを表現するのは、至難のわざでした。イエズス会のヴァリニャーノ巡察師は日本文化への適応を強調しましたが、残念ながら、日本の宗教、とりわけ仏教について、何の理解も示せませんでした。だから彼の教えに従ってできた『どちりいなキリシタン』のなかでも、キリスト教の重要な教えを、ラテン語やポルトガル語の言葉で表わしています。周知の如く、神の名も、当時「デウス」と表現されたのです。したがって、この『どちりいな』は当時の日本人にとっても、まして、現代の日本人にとっても、きわめて分かりにくいものでした。

それでも、当時のキリスト者は、この書にたよって、立派に神を信じ、イエス・キリストを愛するようになり、その信仰のため数多く殉教しました。



現代語訳ドチリイナ・キリシタン宮脇白夜訳　聖母文庫2007年




◇イエズス会の宣教師と日本人の修道士（同宿）が、欧文の教理書を手に、問答をしている。その後方からもう一人の同宿が、茶を運んでいるのが見える。（高見沢忠雄氏の解説）

# イエズス会の信徒組織

祭司→教会を巡回し、ミサを執り行い、秘跡を授けていた

布教初期から、日本人平信徒にある程度のことが出来るように権限を与えて、その地の教会の存続にあたらせた。

**看房**→教会の管理者（メンテナンス、祈りの指導、病人、臨終の世話、葬儀）
**同宿**→宣教師と共に寝起きするところからそう呼ばれ、宣教師の補助をし、未信徒の教化、一般信者への教えを行った。同宿の日本語による説教は、大きな助けとなった。

布教初期から、**コンフラリア（信心会）**と呼ばれる信徒組織が形成されて行った。

特に、**ミゼリコルディアの組（慈悲の組）**は、「慈悲の所作」の精神に基づき福祉活動を行った。

# 各地のコンフラリア／ミゼリコルディアの設立

**1558年**、ガスパール・ヴィレラ神父は、平戸から追放された有力キリシタン7名をミゼリコルディアの会員として、慈悲の組を設立させた。日曜日ごとに、キリシタンたちを世話し、死者を埋葬した。
**1559年**、豊後府内に、トルレス神父の指導により、12人の会員からなるミゼリコルディアが設立された。アルメイダによる病院の管理、運営にあたり、救貧活動に従事した。
**1565年**、天皇による「大うす（デウス）払い」の禁令により、宣教師が堺に追放されている間、京都のキリシタンたちは、自分たちで信仰共同体を維持した。

# ルイス・デ・アルメイダ

・貿易商
・医師
・イエズス会士

医師であり修道士でもあるアルメイダは、ハンセン病の方々のケアや、スピリチュアルケアも行っていた。アルメイダと共に働いたのが、当時のキリシタン信徒達であった。アルメイダは**ミゼリコルディアの組（慈悲の組）**を組織し、男性12人を中心とした体制で、日本で初めて組織的な看護が行なわれた。

当時は所謂、口減らしという風習があり、幼子を野山や海岸に置き去りにして始末していた。この風習をアルメイダは悲しみ、**まず乳児院からスタートした。**このミゼリコルディアの組は、日本人により組織され、日本人の為に、日本人のキリシタン達自らがその実践を行うという形態は非常に稀なものだった。

**1573年**、高山右近の父、ダリオ高山友照は、自らミゼリコルディアを設立し、組親となり、組頭4人を選任した。彼らは、異教徒の改宗（伝道）、貧者訪問、死者の埋葬、祝祭の準備、客人の接待等を行った。

**1583年**、**長崎のミゼリコルディア**設立。組親1名と会員100名からなり、葬儀に参加し、貧者、寡婦、孤児、病人、困窮者のために、喜捨を集めた。
1585年、**女性のミゼリコルディア**発足。
1590年　郊外にあったハンセン病者用のラザロ病院を改修して、一般の**サンティアゴ病院**とした。

**1587年**、伴天連追放令により、大多数の宣教師たちは、有馬、天草の下教区に避難し、活動を控えた。豊後と都のキリシタンたちは、ミゼリコルディアを、信仰の維持、強化を目的とするコンフラリア（組）に変えて行った。1592年には、京都に７～８の組があり、日曜日には、組毎に集まって祈った。
イエズス会は、迫害に対して「組」を再編し、信仰の維持、強化を図った。看坊が、組の助言者となって、宣教師の役割を果たして行った。

# コンフラリアの変化

迫害が厳しくなると、信仰を維持するための組織に変貌していった。

1614年　宣教師の国外追放

➡45名が日本に残留し潜伏して、活動を続けた。

迫害が厳しくなるにつれ、同宿の役割が増大

➡単なる補助者から、パードレ、イルマンの代役（説教、洗礼・・）禁教令以後、ミゼリコルディアやコンフラリアの役割が変化

➡信仰強化の為から信仰を守るための自衛的組織

👉宣教師を保護し、匿い、送り届ける役目

キリシタンの流刑や、布教活動の北上によって、津軽（青森）や、秋田、佐渡にもコンフラリアが作られた。

厳しい迫害下でキリシタンが潜伏出来た要因

◇コンフラリアと呼ばれた信徒組織が基盤となった。

➡司祭がいなくとも、日本人平信徒が洗礼や埋葬などの式が行えたこと。

➡活版印刷によるキリシタン書が残されたこと

Ⅰコリント 2:4

そして、私のことばと私の宣教は、説得力のある知恵のことばによるものではなく、御霊と御力の現れによるものでした。